

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	栗原 亘
論文題目	異種混成的な世界における知のポリティクスを考える： ——H. コリンズの専門知論と B. ラトゥールのアクターネットワーク 理論の比較検討を通して——
審査要旨	<p>「社会」についての探究は、これまでその多くが複数の人間が織りなす関係にもっぱら焦点を当ててきた。本論文における議論は、社会探究のそうした在り方への懐疑によってそのすべてが支えられている。身近な日用品から高度な科学技術にいたる各種の人工物や「自然」に属する動植物といった「非人間」と人間との関係もまた、われわれの社会を成り立たせている要素である。では、それらはどのような関係なのか。社会を探究するにはこの関係を正面から取り扱わねばならない。こう主張する本論文は、この関係を経験的に問うための理論枠組を整備しようとする。</p> <p>題目にある「異種混成的な世界」とは、人間と非人間からなる世界を意味する。本論文は、人間と非人間の間をどう把握・記述すべきなのか、そしてそのうえで、それをどのように構想していくのかという主題を、知のポリティクスという観点から考察する。この目的のもと、本論文は、科学社会学/サイエンス・スタディーズの領域に目を向け、そこで興隆してきた人間-非人間と知の問題における対照的な二つの流れ、それぞれを牽引してきた2人の代表的論者--- H. コリンズと B. ラトゥール---の議論に着目する。そして、2人の議論のそれぞれの特性を、知のポリティクスという観点から掘り下げ、包括的かつ細部にわたって検討しながら両者の長所と短所を抉出し、両議論には還元できない第三の道を模索しようとする。</p> <p>著者はまず、サイエンス・スタディーズの略史を示し、そのなかでコリンズとラトゥールが対照的な関係にあることを示した上で、まずコリンズの議論から検討を開始する。著者は、コリンズらが「サイエンス・スタディーズの第三の波」プロジェクトにより専門知の理論を構築していく過程、さらに、その理論に基づいて提起された「選択的近代主義」について詳細に検討し、コリンズらの議論が、人間中心的な観点を採ることを浮かび上がらせる。すなわち、コリンズは、人間たちから成る「社会」を想定し、非人間をあくまで人間によって解釈されたり、利用されたりする対象として捉えており、その上で、それを適切に解釈・利用できる者、すなわち適切な専門知を有する者こそが人間と非人間の関係構築に対して積極的に参与すべきであるとする立場に立っている、ということを明らかにする。コリンズの議論においては、既存の専門知の体系を尊重する知のポリティクスが構想されていることを確認し、著者は次にラトゥールの議論を検討する。</p> <p>著者は、ラトゥールが、コリンズとは対照的に、アクターネットワーク理論 (ANT) の観点から、われわれが生きる「社会」を捉えるうえで非人間の果たす能動的な役割を強調する、脱・人間中心的アプローチの立場をとっていることを示す。著者は、ANT の観点から「社会」と「自然」といった二分法も否定されること、そして、知の在り方についても、いわゆる専門家に限らず、通常は素人とみなされるような人々をも知の形成へと積極的に参与させることが必要であるという考えを読み解き、そこに既存の知の体系を組み換えていく、いわば変革志向的な知のポリティクスの構想を見出し、さらにそれが持つ「近代」の乗り越えを目指す知の運動という、政治的な実践としての側面を明らかにしていく。そしてさらに、ここで言う「政治性」とはいかなるものかを掘り下げ、「科学」と「政治」の切り分けを主張するコリンズに対し、「科学」もまた「政治」であるとするラトゥールの立場の特徴を析出する。</p>

氏名 栗原 亘

2つの議論をそれぞれ詳細に検討した上で、著者は、両者の議論の相互関係を、知のポリティクスという観点からより詳細に比較検討する。その作業を通して、著者は、両者が、人間中心主義的なアプローチと脱・人間中心主義的なアプローチ、既存の知の体系を尊重する知のポリティクスと変革志向的な知のポリティクスという表面的な対立関係を越え、実は相互排他的な関係にはないことを示し、両者を架橋し有益な理論的な協力関係を築くことを試みている。それにより、新たな知のポリティクスの構想へと踏み出そうとする。

以上を踏まえ、著者が本論最終段階で試みているのは、ラトゥール寄りの立場をとりつつ、コリンズとラトゥールの議論を連携させた、異種混成的なネットワークの新しい記述のあり方を提示することである。著者はこれを「知の地形図の作成」と呼び、人間と非人間からなるネットワークを可視化しそれを適切に統治するための知のポリティクスの構想の立脚点となりうるものと論じる。チャレンジングな研究に発展する可能性を含む結論である。

だが、本論文には議論を詰める余地がいくつか残されている。例えば、コリンズとラトゥールの議論を相互に補完し合うものとして架橋するためには両者の関係性についてまだ検討すべき問題が残されている。また本論の独創ともいえる知のポリティクス、知の地形図についてもより精緻な議論が必要であると思われる。しかしながら、これらの問題は、本論文の今後のさらなる展開の糸口ともいえ、重大な瑕疵とはいえない。

わたしたちの社会は、今後ますます多様な非人間を組み込んでいくことと思われる。また、気候変動などの問題に直面する中で、自然、地球そのものとの関係も問われている。このような状況において、人間と非人間の関係からなる異種混成的な世界における知のポリティクスを研究テーマとし、既存の理論的潮流を丹念に整理し精査・検討した上で、新たな知のポリティクスの構想に向けて可能性を切り拓こうとする本論文は、テーマの斬新性と重要性、議論の独創性、また今後の研究の展開にむけて確かな土台を築き得ている点から判断して、博士学位請求論文として大変優れており、博士（文学）の学位を授与するに値すると認められる。

公開審査会開催日	2020年 10月 7日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学・教授	草柳千早	社会的相互作用論	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学・准教授	池田祥英	理論社会学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学・名誉教授	那須 壽	理論社会学	博士(早稲田大学)
審査委員	東京大学・名誉教授	松本三和夫	科学社会学	博士(東京大学)
審査委員				